

## 看護学専攻3年次学生の臨地実習に向けた共通技術演習導入の試み

～「自信を持って実習に臨む」を目標に～

山口 智美<sup>1</sup>・井上 晶代<sup>1</sup>・大町いづみ<sup>1</sup>・中尾 優子<sup>1</sup>

保健学研究 20(2): 31-38, 2008

( 2007年12月20日受付 )  
( 2008年1月25日受理 )

## はじめに

看護を取り巻く環境の変化は、急速な少子高齢化や医療技術の進歩等大きく変化し、看護職者には、より患者の視点に立った質の高い看護の提供が求められている。このような変化は、学士課程における看護基礎教育にも強く影響している。平成16年3月、文部科学省は「看護学教育の在り方に関する検討会」報告書「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標<sup>1)</sup>」を発表し、到達目標と課題の明確化をはかった。これは昭和27年から始まった日本の看護学学士課程以降、初めて示される包括的な大学卒業時の到達目標であり、看護の学士課程が「保健師、助産師、看護師に共通した看護学の基礎を教授する課程」であることや、「看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程」であること等を明確にした。つまり、卒業後も多様に変化する社会ニーズに対応しつつ、自己発展できるような基礎的能力を備えた、質の高い看護職者の育成が大学には求められているといえる<sup>2,3)</sup>。しかし、医療現場や社会ニーズの変化に対応できる教育内容が強く求められる一方で、現行カリキュラムや保健師助産師看護師学校養成所指定規則(以下、指定規則)に起因する制限が、学士課程における教育内容の自由な展開を阻む、という矛盾した構造にあることも指摘されている<sup>4)</sup>。続いて平成19年4月、厚生労働省より「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書<sup>5)</sup>が打ち出された。基礎教育で修得する看護技術と臨床現場で求められる現実には大きな隔たりが生じており、これらは基本的な生活能力や生活体験の乏しさ、コミュニケーション能力が不足がちであるといわれる現代の若者像の特徴とも相まって、新卒者のリアリティショックや早期離職に繋がっているとの指摘もある<sup>6,7)</sup>。静脈注射を診療補助行為の範疇とする行政解釈がなされたことや、医療技術の高度化などに伴う看護の質的变化は、現役学生の臨地実習体験にも影響していると思われる。現行カリキュラムでは、学生は演習及び臨地実習の範囲や機会が限定されるだけでなく、無資格で実施できる身体侵襲を伴う看護技術の実施が制限されている現状がある。また、臨地実習では主として1人の患者について看護過程を展開し実施するが、卒業後の現場では複数を受け持ちなが

ら、複雑かつ多種多様な高度医療器具や薬剤を取り扱うことを求められる現実がある。「看護基礎教育の充実に関する検討会」中間報告<sup>6)</sup>では、新人看護師が学生時代にもっと受けたかった看護基礎教育の内容として「注射などの医療行為の技術教育」や「療養上の世話の看護技術」といった基本的な事項を挙げていたと報告している。これは看護技術演習内容や実践機会に対する学生ニーズの高さともいえる。以上のように厳しい現状下ではあるが、本看護学専攻では、これまでも学生の看護実践能力向上や、学生が充実した実習体験を経て自己発展できる看護専門職者として成長することを支援するための方法を模索してきた。今回、本専攻の学生が自信を持って臨地実習に臨み、積極的に学びの機会を掴み取りながら多くの成功体験をして欲しい、という思いから臨地実習開始直前の3年次学生全員を対象に、平成19年度実習前共通技術演習を企画及び実施した。ここではその過程と内容、成果、そして今後の課題について報告する。



写真1.採血風景

## 共通技術演習導入の実際

## 1. 共通技術演習実施の経緯

従来、各講座で行われていた実習前の技術演習において、共通の項目は「一斉に全教員で関わってはどうか」という意見のもと、2007年5月開催の臨地実習委員会において実習を控えた3年次生全員を対象とした共通技術演習実施の企画が発足した。6月、臨地実習委員会の5名(各講座代表)が共通技術演習ワーキンググループメ

1 長崎大学医歯薬学総合研究科保健学専攻看護学講座

## 活動報告

ンバー（以下、WGM）として活動を開始し、6月26日『第1回実習前オリエンテーション・共通技術演習の在り方検討ワーキング』の話し合いが行われた。7月、演習内容及び演習項目責任者を決め、その案を臨地実習委員会に提出し、承認された。その後、看護専攻教員へ演習内容、日時の周知を行った。確定した3つの演習項目（点滴治療中、右片麻痺患者のバイタルサイン測定、寝衣交換 点滴治療中、右片麻痺患者の車椅子移乗・移動 採血・赤血球沈降速度測定）について、教員の協力を得、それぞれの担当が決定した。8月6日学生へのオリエンテーション、8月28・29日の2日間を使い、演習当日の動き、演習内容について全教員へオリエンテーションを実施した。WGMは必要物品の点検及び注文などの準備を行った。準備品のうち不足の寝衣については、実際に長崎大学医学部・歯学部附属病院（以下、附属病院）で使用されるものを輔仁会より無料で貸与された。9月に入り、10日の実施に向け、WGMでは授業案の最終決定、必要物品の最終準備、採血ボランティア教員の募集、教員・学生へのアンケート作成を行った。臨地実習委員会では感染対策委員会、学務及び附属病院へ緊急時の対応依頼、臨地実習指導者へ演習内容の周知等、安全に演習項目が実施されるよう体制の最終確認を行った。以上のような実施までの経緯（表1）を経て、9月10日、11日の2日間、3つの演習項目に対し2コマ（1コマ90分）合計6コマを保健学科全教員の協力の基、実施する準備が整った。

## 2. 内容と実際

### 1) 演習担当教員への事前説明会

#### (1) 実施前の準備

学生にとって効果的な技術演習となるように、教員1名に対し2グループ（1グループ3～4名）担当とした結果、延べ教員人数29名が必要となり、本専攻教員ほぼ全員の協力が必要となった。WGMで、各技術演習の教員担当案を作成し、演習要綱とともに、各教員へ配信し

た。その後、各教員の日程調整後各演習の最終的な教員担当を決定した。

演習時の円滑な運営と指導内容の統一化を図るために、教員説明会を以下の内容・日程で実施した。

#### (2) 説明会の実施

日時：平成19年8月28、29日 11:00～11:30

（いずれかの1回参加とする）

場所：第1看護学実習室

担当：各演習項目責任者（WGM）

対象：看護学専攻全教員（医学系教員を含む）29名

参加人数：28名

内容：演習の具体的な進め方、指導ポイントなどを説明し、意見交換及び演習当日の円滑な運営と指導内容の統一化を図った。演習の具体的な進め方や指導ポイントなどを説明し意見交換を行なった。その結果、参加教員から専門領域、学生の実習状況などの観点から、演習内容、準備、進行について貴重な意見やアドバイスがあった。

#### (3) 実施後

各教員からの意見等を元に、WGMで最終打ち合わせを行った。演習指導案を修正し、また、採血演習については、演習ビデオを作製した。



写真2. 車椅子移乗

表1. 共通技術演習実施の経緯

	5月	6月	7月	8月	9月
共通技術演習ワーキング			演習項目責任者の決定 授業案の検討	教員への説明会実施 学生オリエンテーション実施 必要物品の準備	授業案の最終決定 被採血ボランティア教員の募集 教員及び学生用アンケートの作成
臨地実習委員会	演習企画の発足	共通技術演習ワーキングメンバーの決定	演習内容及び日時の決定 教員へ演習内容の周知	演習担当教員の決定	感染対策委員会への連絡 学務及び附属病院へ緊急時の対応依頼 臨地実習指導者へ演習内容の周知
教員				オリエンテーション受講	
学生				オリエンテーション受講 事前学習	

## 活動報告

### 2) 技術演習の実施

日時：平成19年9月10日 12:50～16:00，9月11日 8:50～16:00

場所：第1看護学実習室

対象：3年次生67名

担当教員数：29名

内容：学生18グループ(1グループ3～4名)のうち、各教員は2グループを担当し、下記3項目の技術演習を(表2)のスケジュールに沿って実施した。については多発性脳梗塞のリハビリ期で右片麻痺と失語症のある患者を設定した。これは対象である3年次生が1年次の基礎看護学講義及び演習で活用した症例であり、一定の共通理解が得られる適切なものという判断から選択した。

#### (1) 点滴治療中、右片麻痺患者のバイタルサイン測定、寝衣交換

目的：右片麻痺のある対象者のバイタルサイン測定、体位変換及び点滴中の寝衣交換の看護技術項目を実施することで、学生がこれまでの学習(身体的状態の把握、理解、看護過程の展開、援助の実際)を統合するための一助とするとした。

内容：グループ内の学生1名が患者役、2名がそれぞれ主たる看護師と補助看護師の役を担い、バイタルサイン測定、体位変換及び点滴中の寝衣交換の援助を実施し、残りの学生は観察者となる。これを全員が一巡して実施した。

#### (2) 点滴治療中、右片麻痺患者の車椅子移乗・移動

目的：片麻痺、コミュニケーション障害があり点滴施行中である対象者の安全・安楽・自立を考えた上で車椅子への移乗・移動ができるとした。

内容：教員のデモンストレーションの後に、各グループの学生が1名ずつ患者・看護師役となり、ベッド上端座位の点滴治療中患者を安全・安楽・自立を考慮しながら移乗し移送するとし、これを全員が一巡して実施した。

#### (3) 採血・赤血球沈降速度測定

本演習は身体侵襲を伴うため、人体採血に関しては自由意思による参加で成績等には関与しないことを説明し、臨地実習委員会委員長名を付した同意書をWGMが作成し、提出をもって採血演習実施を可能とした。また、

同意書は演習終了後1ヶ月間保存し、その後破棄した。針刺し事故や気分不良者が発生した時など緊急時の対応策としては、学生全員のHB抗体検査結果を把握し、緊急時は附属病院で対応してもらうように依頼し、協力を得た。また、血管が出にくい学生への配慮として、事前に本学教員及び臨床実習指導者に被採血ボランティアを依頼し10名の協力を得た。

目的：静脈血採血の目的と留意事項を理解したうえで、注射器による静脈血採血を安全・安楽に実施できる。赤血球沈降速度測定の目的を理解したうえで正確に実施し、アセスメントできるとした。

内容：教員が事前に作成したビデオを用いて採血及び赤血球沈降速度測定技術の流れとポイントについて説明し、その後、学生は各グループに分かれて採血指示票(資料参照)確認後にモデルを用いて練習を行った。教員の監視下で学生が安全に採血を実施できることが確認できた。学生同士で互いの採血を行うこととし、採取した検体は赤血球沈降速度を測定し、測定結果をアセスメントした。

### 3) 技術演習の評価

技術演習の最終日に無記名自記式質問紙を学生及び教員に配布し、所定のボックスにて回収した。質問紙は学生用と教員用(資料参照)があり、共にWGMが独自に作成したりカートスケールと自由記載で構成されている。本質問票で技術演習の目的や内容および運営方法の妥当性などについて聴取し、感想も自由に記載してもらった。

## 3. 結果

参加学生数は67人で、3年次後期実習履修予定者全員の参加があった。担当教員は1日目9人、2日目20人であった。医学系教員を含めた看護学専攻教員のほぼ全員と附属病院臨床実習指導看護師2名の参加協力が得られた。全演習項目の実施過程において、学生の体調不良、事故、途中辞退もなく、時間内に計画した演習項目をすべて実施し、終了することができた。後片付けには学生も加わった。

#### 1) 目的について

限られた回答数(学生：20名30%，教員：3項目平均6名69%)とはいえ、「演習前の不安がきちんと演習を

表2. 共通技術演習スケジュール

	9月10日(月)	9月11日(火)	9月12日(水)～9月13日(金)
8:00～9:00	オリエンテーション	演習 点滴治療中、右片麻痺患者の移乗・移送	領域別オリエンテーション
9:00～10:00			
10:00～11:00	演習 点滴治療中、右片麻痺患者の寝衣交換	演習 採血・赤血球沈降速度測定	
11:00～12:00			

受けることで軽減された」「実施したものについてかなり勉強になり、自信がついた」「実習へ行くモチベーションがあがった」など、学生は演習に対する高い満足感を示していた。教員からは、「基礎看護学実習終了から約半年のブランクのある学生にとって、既に学んでいる原理原則を自分の体を使って確認するという演習は、心身ともに準備態勢を整える上で非常に効果的であった」など『適切』と回答したものは8割を超えた。

## 2) 内容(演習項目や事例を含む)について

演習項目について、時間配分から3つの技術項目は妥当な数であった。学生からは「採血の演習は実際にするのとモデルとでは違ったことが沢山学べた」「日常生活の援助や採血など一つ一つ丁寧に確認しながら実施できた」など、内容に関する満足感は得られていた、「さらに自分の知識や技術の未熟さに気付いた。しっかりした知識を持って点滴や車椅子移乗など練習しなければならないことは練習して臨みたい」「演習をしたことでできること、できないこと、復習しなければならないこと、苦手なことがわかった」など、今回の演習内容が課題項目として発展していることが伺えた。教員からは「学生が患者像を描きやすい事例を用いたのは適切であった」「VTRによる事例の共通認識は良かった」など、演習項目に共通事例を用いたことが評価されていたが、一方で「事例が複雑であった」という意見もあった。

## 3) 時間配分, 時期, グループサイズについて

時間配分は、「デモンストレーション時間を工夫するべき」という意見もあったが、「じっくり関わってもらえる・実施できる」という学生教員双方からの意見が多かった。時期については、学生教員共に実習直前のこのタイミングをポジティブに評価している意見が多かった。グループサイズについては、学生教員共に教員とその配置数及び1グループの学生数は適切とする意見が多かった。

## 4. 看護基礎的技術演習教授方法及び評価方法に関する国内外の取組みと考察

宮芝<sup>8)</sup>らの研究では、看護学演習教授活動の解明を試みた結果、看護学演習を展開する教員が技術に精通し、綿密な授業計画を立案することの必要性の他、学生との円滑なコミュニケーションや学生のレディネスを把握し、実践の場面を想定できるような設定をすることの重要性を指摘している。また、津田ら<sup>9)</sup>は基礎看護技術演習指導に関わった教員への学生評価を考察し、「質問やクイズを出す」、「根拠を一緒に考える」などの具体的指導や、教員-学生関係が確立された「学習意欲がわく指導」が支持されたと報告している。しかし、反対に「指導教員によって言うことが違い、不安や混乱がある」といった問題もあり事前の教員説明会やデモンストレーションの

重要性を指摘している。これらの点において、今回の共通技術演習では、共通理解できている事例を用いたことや教員への事前説明会を開催したことが、教員の共通理解及び指導方法の統一に貢献したと考えられる。加えて、小グループで十分な時間配分を設けたことが学生と教員の関わりを促進する方向に働いたといえるかも知れない。

穴沢ら<sup>10)</sup>が分析するように、1996年指定規則改正後の変化を背景に、1998年以降の基礎看護技術演習に関する研究論文数は増加している。その内容は学習者を対象として授業評価及び指導上の課題を明確化しようとするものが主体である。これは看護学にとって技術演習指導がいかに重要視されているかを示すばかりでなく、その教授手法や評価の複雑さと学生の習得度確認の困難さを反映しているともいえる。本専攻における共通技術演習に類似したものとして、山崎ら<sup>11)</sup>は卒業前看護技術演習に取り組み、その効果と課題について述べている。そこでは、卒業前2週間間に診療補助技術を中心にした14項目を学生が自ら選択して練習をしている。卒業前の演習が就職後の自信に繋がったかは不明確だったが、演習後の学生の自信の程度は7割以上が「一人でできる」、「支援があればできる」と回答している、と報告している。3年次の臨地実習直前のタイミングで実施した今回の共通技術演習と、今後予定されている現4年次生への卒業前採血技術演習は共に学生の自信に繋がるなど、ある一定の効果を持つと期待される。

今後更に重要となる看護実践能力評価のあり方という点では、OSCE (Objective Structured Clinical Examination) などの共用試験導入が看護学教育にとっても必要かつ重要といわれている。OSCEは1975年にHardenらによって発表されて以来、今日まで特に医学教育分野において発展してきた。複雑かつダイナミクスな現場での適切な判断や、ケア実践能力が求められる医学教育分野では、従来のペーパーテストによる評価が困難だった領域、例えば精神運動領域(診察・検査等の技能)および情意領域(態度・習慣などの人間性)の評価に有効であるとされ、世界的に広く導入されている。日本でも医学教育分野において既に導入が進められている。このような流れを受けて、今日では看護教育分野での応用も検討されている。2006年、第2回東北大学看護教育ワークショップ<sup>12)</sup>においては、臨地実習開始前に行う共用試験としてのOSCE導入の可能性を柱にワークショップ及び議論がなされた。この中では、平成13年3月に示された医学部学部教育のモデル・コア・カリキュラムが、臨床実習開始前の共用試験(OSCE)で到達度評価をすることを含んだ構想となっていること、更に平成17年1月の中央教育審議会答申では、日本の高等教育の将来像として学部教育各分野でのコア・カリキュラム導入の必要性が指摘されていることが確認された。これらを踏まえ、ワークショップでは看護教育分野における臨床実習開始前の到達度評価のあり方という点も含め、今後広く

議論することが必要だと示唆している。今回の共通技術演習では到達度をチェックするという点は重要視していないが、今後の取り組みの発展的可能性として、このような時代の潮流に適した形で展開できるのかもしれない。

ユニークな技術演習教授法の一例としてJeffrie.P.ら<sup>13)</sup>はインディアナ大学看護学部の基礎看護学講座受講生120名(A:50名, B:70名)を対象に、主要カリキュラム変更の一部として取り入れた新看護基礎技術教授方法と既存の教授法の比較研究を行っている。全体への講義とデモンストレーション中心のいわゆる伝統的演習方法と新教授法(Self-paced:自己ペース的, interactive:相互作用的, student-centered:学習者中心的)を比較したときに、両グループの知識・理解面及び演習室での基礎技術実施パフォーマンス能力の差は殆ど無かったが、学生の満足度は新教授方法の方が優位に高いことがわかった。これは新教授方法の特徴;学生2人組,導入後は学生主体で説明写真パネルやCD-ROMを活用しながら技術練習を数週間反復練習し直ちに現場で実施する,教員はFacilitator(促進・手助け役)であって主導的でない等,という点と関連していると考察される。米国・オーストラリアなどでは演習と実習が同時に進行するカリキュラムが珍しく無く,日本とのシステム的な違いがあり即座に応用できるとは言いがたいが,学生中心の教授方法のあり方を考える上で参考になり得る。

##### 5. 本専攻共通技術演習の今後の課題

「何故共通技術演習を行うのか」という実施に協力した教員側の疑問もあり,今後は更なる目的の明確化と周知に対する工夫を行うことが重要であろう。また,今回は「自信をもって実習にいける」という学生の目的を示したが,具体的目標の提示がなく,共通認識に不十分さが残ったと言える。「内容の精選が必要」という声もあるため,次年度実施したい演習項目に関する意見を出してもらい,ヒヤリ・ハット報告例を参考にすると等の工夫が必要である。全体的評価としては,学生と教員のコミュニケーションの円滑化及び満足感の向上,実習への意欲向上というような効果が期待される面が多々あった。

今回,短期間での周知であったため,実習要項配布時期と重なるなど,情報の混乱があった。来年度の継続実施に向け,事前周知については,年度初めには概ね周知し,早くからの準備が必要である。今回,学生に対するアンケートの回収が思わしくなかったが,共通技術演習を評価するためには配布と回収方法の検討が必要である。また,演習実施のために掛かった経費は(表3)に示す通りであるが,これには附属病院入院患者用寝衣のレンタル料金は含まれていない。今後寝衣の購入を含めた必要経費の予算確保をする体制作りも不可欠である。

##### おわりに

時代の流れと共に,看護への社会的ニーズは変化している。看護学基礎教育もその変化を敏感にキャッチし,反映させながら柔軟に対応することが求められている。今回,共通技術演習導入を試みたが,今後の課題も多く残され,完成されたものとは言いがたい。しかし,制約の多い現行カリキュラム枠組みの中で,限られた人的及び時間的資源をどう効果的に活用するか,また現場への対応能力を備えた未来の看護職者育成のために,教員が相互協力しながら学生を中心とした関わりを展開する工夫,という点において幾つかの手がかりを提示できたのではないだろうか。ここまで述べてきたように,看護の基礎的な技術演習の教授方法やその評価方法,また学生の看護実践能力の向上のための様々な取り組みが国内外で行われ,報告されていが,今回本専攻で計画・実施した共通技術演習のように,実習直前に全教員が小グループの学生と密に関わりながら展開する方法は特徴的であったといえ,今後の更なる発展が期待できる。

##### 謝 辞

演習に参加し学生指導をいただきました全教員及びボランティア参加いただいた附属病院の大山祐介,竹嶋順平両看護師,患者用寝衣を無料で貸与くださった輔仁会にお礼を申し上げます。また,演習企画・運営のメンバーとして活動いただきました前基礎看護学講座准教授 岩永喜久子先生に謝意を表します。

活動報告

表3. 関連費用

物品	単価(円)	個数	計
アルコール面(単包式)	1,000	1箱(200包)	1,000
酒精綿	300	2箱	600
血沈台	3,920	2台	7,840
ブラッドバン	2,260	1箱(500枚)	2,260
注射針	400	2箱(100本)	800
シリンジ5cc	1,300	2箱(100本)	2,600
ロールシート	600	1巻	600
ゴム手袋	500	3箱(SML各1)	1,500
ディスポ赤沈管	4,100	1箱(100本入)	4,100
血沈測定用ディスポシリンジ	1,480	2箱(4本)	2,960
採血管	1,540	1箱(100本入)	1,540
感染性廃棄物ボックス	550	18個	9,900
			35,700
			税5% 1,785
			+ = 37,485
点滴使用技術			
ラクテック500ML(ソフトバック)	2,560(20本入)	1	2,560
ウェルバス1L	3,738(1L)	2	7,476
点滴セット	1,365(1箱)	3箱	4,095
			14,131
			税5% 707
			+ = 14,838
			合計: 52,523

資料

★採血指示票★ (外来)

採血日時: 2007年9月11日

---

ID No 123456 氏名( )

---

No.	検体名	検査項目	数	採取量
01.	血液	血液沈降速度	1	1.6ml

資料

平成19年度実習オリエンテーション・コア演習  
実施後質問紙(学生用)

9月10,11日、2日間にわたるコア(共通項目)演習お疲れ様でした。臨地実習委員会は、今年度の演習目的を“自信を持って実習に行ける”とし、実施内容を企画しましたが参加されていかがだったでしょうか? 来年度の演習企画の参考にしたいと思しますので皆様の率直な意見をお願いします。9月12日(水)までに学務係に提出をお願いします。

1) 演習目的“自信を持って実習に行ける”について。(目標は達成できそうですか? できないとすれば、残された課題は何だと思いますか?)

2) その他、感想、意見を何でも自由にご記入ください。(日程、時間配分、グループの人数、技術演習内容、担当者への要望等)

3) 今回のコア(共通項目)演習の内容についての満足度はいかがでしたか? あてはまる番号に○をお願いします。  
①大変満足 ②やや満足 ③普通 ④やや不満 ⑤不満

ご協力ありがとうございました。  
長崎大学医学部保健学科看護学専攻 臨地実習委員会

資料

平成19年度実習オリエンテーション・コア演習  
実施後評価のための質問票(教員用)

臨地実習委員会は、初めての試みとして平成19年度「実習オリエンテーション・コア演習」を企画し、先生方のご協力のもとに実施することができました。ありがとうございました。  
早速ですが、委員会ではご協力いただいた皆様のご意見・ご感想を頂き、今後の改善に繋げていきたいと考えます。ご多忙中大変恐縮ではございますが、本質問票をご記入頂き、9月14日(金)17:30迄に〇〇のレターボックスにご投函くださいますようお願い申し上げます。

\* 以下について該当するところへ○をつけてください。また、空欄にはコメントを記載してください。

- 担当演習内容: \_\_\_\_\_
- コア演習の目的は(適切、普通、不適切)だった。  
理由及び改善案:
- コア演習の内容(演習項目や事例を含む)は(適切、普通、不適切)だった。  
理由及び改善案:
- コア演習の周知方法は(適切、普通、不適切)だった。  
理由及び改善案:
- 教員のための事前説明及びデモンストレーションは(適切、普通、不適切)だった。  
理由及び改善案:
- コア演習の時間配分は(適切、普通、不適切)だった。  
理由及び改善案:
- 今回のコア演習に関するご意見をお聞かせください。

\* ご協力ありがとうございました。

文 献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標(看護学教育の在り方に関する検討会報告) 文部科学省, 2004, 3月.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/15/toushin/04032601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/15/toushin/04032601.htm)
- 2) 澤田 進: 21世紀の看護学教育, 財団法人大学基準協会, 日本印刷株式会社, 東京, 2002, 資料第56号, 32.
- 3) 吉川千恵子, 上田禮子, 山口智美, ビバリー・ヘンリー: 学士・修士課程における看護学生の到達目標としてのコンピテンシー, 平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, 12月, 1-121, 2005.
- 4) 石垣和子: 21世紀の看護系大学・大学院教育の方向性(声明) 日本看護系大学協議会, 千葉, 正文社, 2007. 3月第1版, 12.
- 5) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 厚生労働省, 2007, 4月.
- 6) 看護基礎教育の充実に関する検討会 これまでの議論の中間的なとりまとめ(資料) 看護教育, 48: 320-327, 2007.
- 7) 星野一正: 新卒看護師による看護技術の問題点. 時の法令1716号 民主化の法理 医療の場合109, 57-63, 2004.
- 8) 宮芝智子, 舟島なをみ: 看護学演習における教授活動の解明 援助技術の習得を目標とした演習に焦点をあてて -. 看護教育学研究, 14: 9-22, 2005.
- 9) 津田右子, 西澤三代子, 柴田京子, 武井功子, 入江寿美子, 平岡正史, 古屋敷明美: 基礎看護技術演習にかかわった10人の教員への学生評価からの指導評価 看護学生の自由記載法による全身清拭技術演習の指導内容評価への質的分析から, 呉大学看護学部 看護学総合研究, 8: 10-18, 2006.
- 10) 穴沢小百合, 松山友子: わが国の看護基礎教育課程における基礎看護技術演習に関する研究の動向 1991~2002年に発表された文献の分析. 国立看護大学校研究紀要, 3: 54-64, 2004.
- 11) 山崎和子, 本間昭子, 柳原清子, 石塚敏子: 卒業前看護技術演習の効果と課題, 新潟青陵大学紀要, 5: 255-266, 2005.
- 12) 第2回東北大学看護教育ワークショップ報告書: 臨地実習開始前に行う「共用試験」の看護学教育への導入の可能性と課題. 東北大学医学部保健学科看護学専攻, 東北大学病院看護部, 1-54, 2006.
- 13) Pamela R. Jeffries, Sandy Rew, and Join M. Cramer: A comparison of Student-Centered versus Traditional Methods of Teaching Basic Nursing Skills in Learning Laboratory. Nursing Education Perspectives, 23(1): 14-19, 2002.

# Introducing a teaching activity of a core basic nursing skills in the learning laboratory for the third-year students

Satomi YAMAGUCHI<sup>1</sup>, Akiyo INOUE<sup>1</sup>, Izumi OMACHI<sup>1</sup>, Yuko NAKAO<sup>1</sup>

1 Department of Nursing, Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 20 December 2007

Accepted 25 January 2008